

# 荒木村重

## 【略歴】

- 天文4年（1535年）摂津の川辺郡坂根（川西市栄根）で生まれる
- 12歳の時父を碁盤に乗せ座敷を3回回った。向後は項羽を抜く大食こそ道理なりと。
- 15歳で池田21人衆の中の粗暴な反主流七人衆を酒宴の席で切り倒し一躍名を挙げた。
- 37歳で茨木重朝を破り茨木城に入った。信長の側近に書状を送り「摂州13郡を、それが切り取り仰せつけられ・・・」と言いつつ。信長は摂津に手を焼いていたので喜んでこれを了承した。
- 左図:「天正元年（1573）信長なに思い給いけん。佩刀を抜き饅頭二つ、三つ刺し抜き“これこれ村重”とのたまいけるを、村重大口開いてかの饅頭食わんとす。信長大いに感じ、腰にさした義弘卿の脇差を手ずから贈り給う。」
- 天正6年（1576）秋ごろ、村重が信長に逆心の噂が立つ。信長呼びだすも出仕せず。
- 1579年有岡城陥落
- 村重は道糞と自虐の名を付けたが、秀吉より道薫と名を変えさせられ秀吉のお伽衆となって52歳の生涯を閉じた。



歌川国芳画「荒木村重像」陰徳太平記のエピソード

# 池田城と村重



池田城跡公園(平成10年落成)

・建武3年(1336)後醍醐天皇の南朝方と足利尊氏の北朝が対立して北朝の軍勢が『池田城にて数日夜詰』との記録があり、1300年前半には池田城は存在していた。

・現在の池田城は3階、武家屋敷風、日本庭園(遺跡で枯山水が発掘) 逸翁美術館北側

★ ・村重は既に信長の寵臣となり摂津守となり旭日昇天の勢いであった。

・池田知正派の18人が、村重の舅を村重に通じているとの理由で忙殺した。これにより村重は池田城を滅ぼし、天正10年伊丹親興を滅ぼし伊丹城主となる。

## 荒木村重の台頭

- ・荒木村重は丹波波多野一族の出身と言われ。父の高村と共に池田氏に仕えていた。
- ・永禄年間(1558~70)城主池田勝正の頃から村重は力をつけ始め、やがて「池田21人衆」の一人となった。
- ・この頃の摂津13郡の城主は

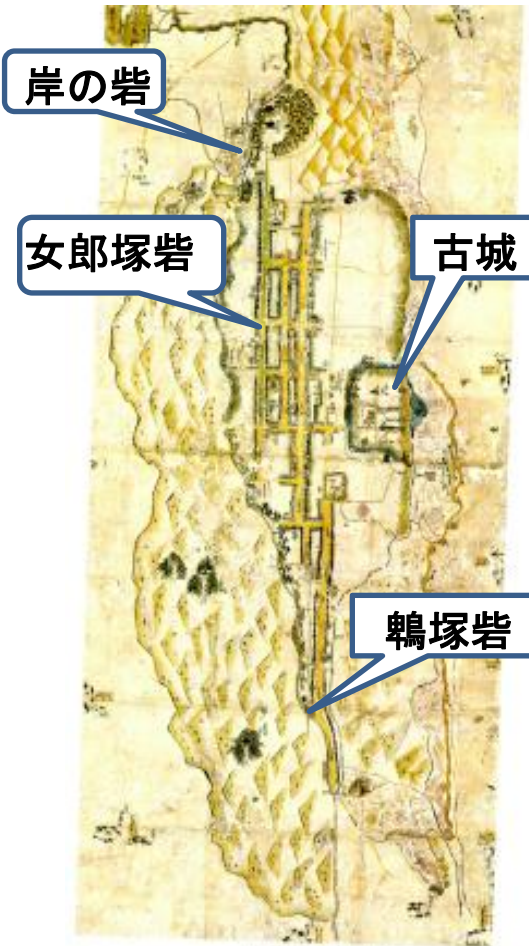
★高槻城主	和田惟政
茨木城主	茨木重朝
多田城主	塩川伯耆守
★伊丹城主	伊丹親興
有馬城主	有馬出羽守
★池田城主	池田正勝
能勢城主	能勢十郎
★・・・	摂津3守護

- ・これらの城主は室町幕府の御家人であったが、お互いの牽制で団結がなかった。
- ・おりしも永禄11年(1568)信長は足利義昭を奉って京都に入り畿内平定に着手。
- ・目下の敵は大阪石山本願寺で、その裏で気脈を通じる上杉、毛利の存在であった。

- ・信長は摂津3守護(高槻・伊丹・池田)に石山本願寺、三好三人衆と戦わせたが消耗激しく力を弱めていった。
- ・元亀元年(1570)池田氏一族に内紛が起き、池田勝正は追放され池田知政が城主になる
- ・元亀2年(1571)茨木氏、伊丹氏、和田氏と池田知政を支持する荒木村重、中川清秀が猪名川(白井河原)で激突。村重が茨木重朝の首を取り茨木城に入った。36才であった。まだ村重は池田知政の家臣である。
- ・摂津を任されている和田惟正は池田を攻めようと、境に砦を2基築いた。池田と言うが実質は荒木軍団であった。この戦は池田の圧勝で終わる。★



# 伊丹氏の時代から村重へ



2 寛文9年伊丹郷町絵図\*伊丹市立博物館蔵(187.1X96.1cm)

寛文9年(1669)伊丹郷町絵図  
親興落城後(天正2年;1574)95年、  
村重落城後90年経過した頃の図面、  
現在の産業道路以西は未開発

伊丹氏系譜には2系統があり、

- ◎寛政重修諸家譜；伊丹氏惣領（本家）系譜
- ◎北河原森本文書；伊丹森本氏（庶流）系譜

ここでは伊丹氏惣領系譜による

- ・669年天智天皇は利仁に藤原の姓を授ける。利仁より数えて4代目、藤原景俊は伊丹城に住み『伊丹氏』と名乗った。これが摂津伊丹である。
- ・文明4年(1472)伊丹之親が平城であった伊丹城を改築して天守と総構えの城塞を作った。後年の城の素系となった。
- ・戦国時代の伊丹氏で有名なのは親興であろう。永禄11年9月(1568)織田信長が將軍足利義昭を奉じて上洛すると、直ちに信長に呼応して三好氏を攻め、信長は北摂、西摂を抑えると、親興を和田、池田と並んで摂津の三守護に任じ兵庫頭として伊丹に三万貫の所領を与えた。
- ・天正元年頃から將軍義昭と不和になると親興も信長と対立し翌年天正二年11月信長の命を受けた荒木村重に伊丹城を囲まれ落城自刃した。
- ・村重は伊丹城に入ると直ちに城の改修を行い難攻不落の城とした。

# 荒木村重と信長

・荒木村重は、兼ねてより織田信長を置いて天下を取る者はいないと見ており、信長の側近を通じ信長に書状を送り『今よりお見方に参り世々この忠巧を励まし申すべく候。左に候はば摂州13郡をば、それが切り取り仰せつけられて給わり候らえかし。』言い送った。

信長は摂津の平定に手が届かなかったことも有り村重の申し出を了承した。

・天正元年(1573)将軍義昭の謀反があり、信長は上洛し、村重は急ぎはせ参じた。その時の挿話が『陰徳太平記』に出ている。

『信長如何思いけん。村重の御前に出るとひとしく御佩刀を引き抜き給ひ御前に有る盆の中なる饅頭 ニツ、三ツ刺貫き、コレコレ村重とのたまいけるを、満座の人々信長卿例の座興深き事又出でけるよ、初めて参上する者にかかる御行跡こそ更に心得ねと思ひける所に、村重アツと答えてするするさし寄り、大口濶と開いてかの饅頭食わんとす。信長是を見給いて、是日本一の器量なり。云々…。即ち腰に差したる義弘卿の御脇差を抜いて手ずから賜う…。』歌川国芳画エピソード

・村重は既に信長の寵臣となり、摂津の守に任せられ一国の主となり、旭日昇天の勢いにあった。然し形式的には池田知正の家臣であった。

・村重は不穏な動きの有った池田城を攻め滅ぼし、更に高槻城に和田太郎を降し、高山右近を居城させ、茨木城には嫡子新五郎村次を入れ、伊丹城主の親興を攻め落とし、伊丹城主となって壮大な城に改修し名も有岡城と改めた。



らんじゃたい  
蘭奢待 長156.0 重11.6kg 正倉院蔵

伽羅きゃらはインド・ベトナム・東南アジア地方に産する沈香じんこうのうちの優品をいう。これは古来天下一の名香として知られ、室町時代にこの香木が東大寺に納められ、寺名の3文字をその名に隠して「蘭奢待」と名付けられた。時の権力者の垂涎の的になり、足利義政・織田信長・明治天皇による切り取り跡が張り紙によって示されている。信長の切り取りは、多聞山城たもんやまに勅使を迎え、蘭奢待を運びこませたことで、天下人たらんことを誇示するものであった。宗及と宗易のみに付与されたのは、2人が名香炉を所持することに敬意を表したものとされる。

・十五位下摂津の守荒木村重は摂津一円の守護大名として、時に天正2年(1574)39歳であった。

・天正2年4月3日信長は多聞山城へ蘭奢待を持ち込み切り取った。聖武天皇以来の国家珍宝を切り取ることに正面と向かって抵抗する僧侶や皇族(正親町(おおぎまち)天皇の御世)はいなかった。

・この時村重も随行している。



# 村重の逆心・・・何故信長を裏切ったのか？

荒木村重が織田信長に逆心を抱いて居ると言う噂が立ち始めたのは、村重が信長に臣従を誓ってわずか5年後の天正6年(1578)の秋の事である。石山合戦の第一線司令官の荒木村重が本願寺の顕如や毛利輝元と内通しているとの噂であった。十月二十日は大阪天王寺を守る細川藤孝から知らせてきた。二十一日になると各方面から『摂津の守逆心』の報告が入ってきた。さすがの信長も耳を疑った。一郷衆から身を起し異常とも思える出世街道を驀進し、遂に摂津全土の国主にまで上ったのに、『何故謀反に走ったか。これは今もってはつきりしない。本願寺に部下が兵糧を売ったとしても、昔からよくあったことで是ぐらいで信長と仲たがいすることはない。村重の謀反によって摂津全土が信長の敵に回るとき、高槻・茨木・伊丹・尼崎・花熊・三木・御着の諸城が敵になり、信長の中国攻めは両断され、進路も退路も断たれてしまうのである。信長の周章狼狽ぶりが想像できる。“何の恨みがあってそのような事が出来ようか。村重の様な重臣を失ってよい物か。』信長は即刻明智光秀他2名で摂州へ下向させて信長の”意“を伝えさせた。村重は上様の上位の忝(かたじけなさ)さに感涙して『身に覚えのないことにござる。追付安土に伺候して、上様に謹んで御礼言上仕りたい』と伝えたので3人は安堵の思いをなし、安土へ帰り右反命して信長卿はお顔を少し和らげられた。



鶴塚砦(民有地)



北(岸)の砦(土塁)  
(猪名野神社境内)

一方村重は“兎に角安土へ参上し、信長卿のご機嫌を”と天正六年(1578)十月二十三日伊丹有岡城を出立して途中山崎に着いた。然る所村重の家老 荒木志摩守卜清、高山右近将監、中川瀬兵衛、池田久左衛門、他、村重の前に列座して、『・・・安土に行き、上様にお会いの事、他日の御後悔となるであろうと案ずる。・・・』と。安土屋敷に留守居させていた萱野某が早馬を飛ばせて『村重の謀反は明白であるのご詮議も決した・・・』。また明智日向守光秀より早打ちで『・・・信長卿もっての外のお怒り故・・・』と。村重は伊丹有岡城に帰り、ひたすら籠城、遂に反旗を翻すに至った。毛利の援軍が届くまでに信長は5万余騎を山崎に陣を敷く。一方村重は有岡城に1万5千、高槻城に高山右近が3千余騎、茨木城に嫡男村次が3千5百余騎、花熊城に3千余騎、北摂三田城、能勢城、有馬城に豪の者を配し対峙する。まず矛先は高槻城主高山右近に向けられた。キリスト教徒1万人を皆殺しにするという脅しに掛けられ、高山右近は城主たる地位も武士という身分も捨てて城を無血開城した。第2弾は茨木城であった。調略の使者は村重との古くからの友達、古田佐助が立った。主に背くという順逆の道を説かれると武骨者の中川清秀も心を動かされた。天正(1578)11月24日、高槻城に続いて茨木城が無血開城となった。

高槻城、茨木城が無血開城したとの情報を受けた羽柴秀吉は三木の別所長治と対峙していたが、兵はそのまま残し馬回りだけで高槻に近い信長の本陣へ、陣所見舞いに駆け付けた。『お許し頂けますならば、秀吉今一度村重に意見を加え、前の忠義を継がせばやと存ずる。』信長は『よしなに』の一言で席を立った。秀吉の説得には熱い友情が籠っていたが、涙を流して両手をつかえる村重に、秀吉は言葉も出ず、話題を変えざるを得なかった。

しかし、秀吉は何とか村重を翻意させようと腐心し、村重と親しい黒田官兵衛孝高(よしたか)を遣わし説得を試みたが・・・

参考文献:荒木村重と伊丹城(香村菊雄著)

## 有岡城惣構えの図



有岡城は伊丹段丘の東端部の高台を利用した平城で、鎌倉時代末期頃より土地の豪族伊丹氏の居城であり(文和2年(1353)文献に初見)史上最初の天守の伝承もある。天正2年(1574)伊丹親興を破った村重は信長の命により摂津守となり伊丹城を『有岡城』と改名した。そして侍町、町屋を含む全体の周囲を堀と土塁で囲んだ『惣構』を持った城郭を完成させた。惣構の規模は北に岸の砦、西に上臈塚砦、南に鶴塚砦を配した、南北1.7km、東西0.8kmに及ぶ。天正5年(1577)城を訪れた宣教師ルイス・フロイス『甚だ壮大にして見事な城』と記している。

天正6年(1578)11月謀反の疑いを掛けられた村重は有岡城に籠城し、信長の攻撃に1年余り持ちこたえた。天正7年(1579)9月2日夜、村重は毛利の援軍を求めて子息村次の守る尼崎城へ脱出するがその間城内の規律が緩み、内通者が出たため上臈塚砦が内側から開かれ11月ついに落城した。

落城後の村重は毛利氏を頼って尾道に亡命した。最後は秀吉のお伽衆として茶道で仕え、堺の地で52歳で生涯を終えた。

## 残酷な処刑

信長の怒りは凄まじかった。荒木一族と城中に残る人質と捕虜に対し、滝川一益に未曾有の残酷な処刑を命じた。

最初の処刑は12月13日朝、尼崎七つ松で行われた。婦女子のみ122人に対してである。皆衣装を美しく着飾り、今日ぞこの世の見納めと、子供たちも美しく化粧をさせて刑場に臨んだ。仕置き人たちは、母親には子供を抱かせ、張り付け台に引き上げて、鉄砲で撃ち殺すもの。槍で突き殺すもの、目を覆うばかりのむごたらしさであった。

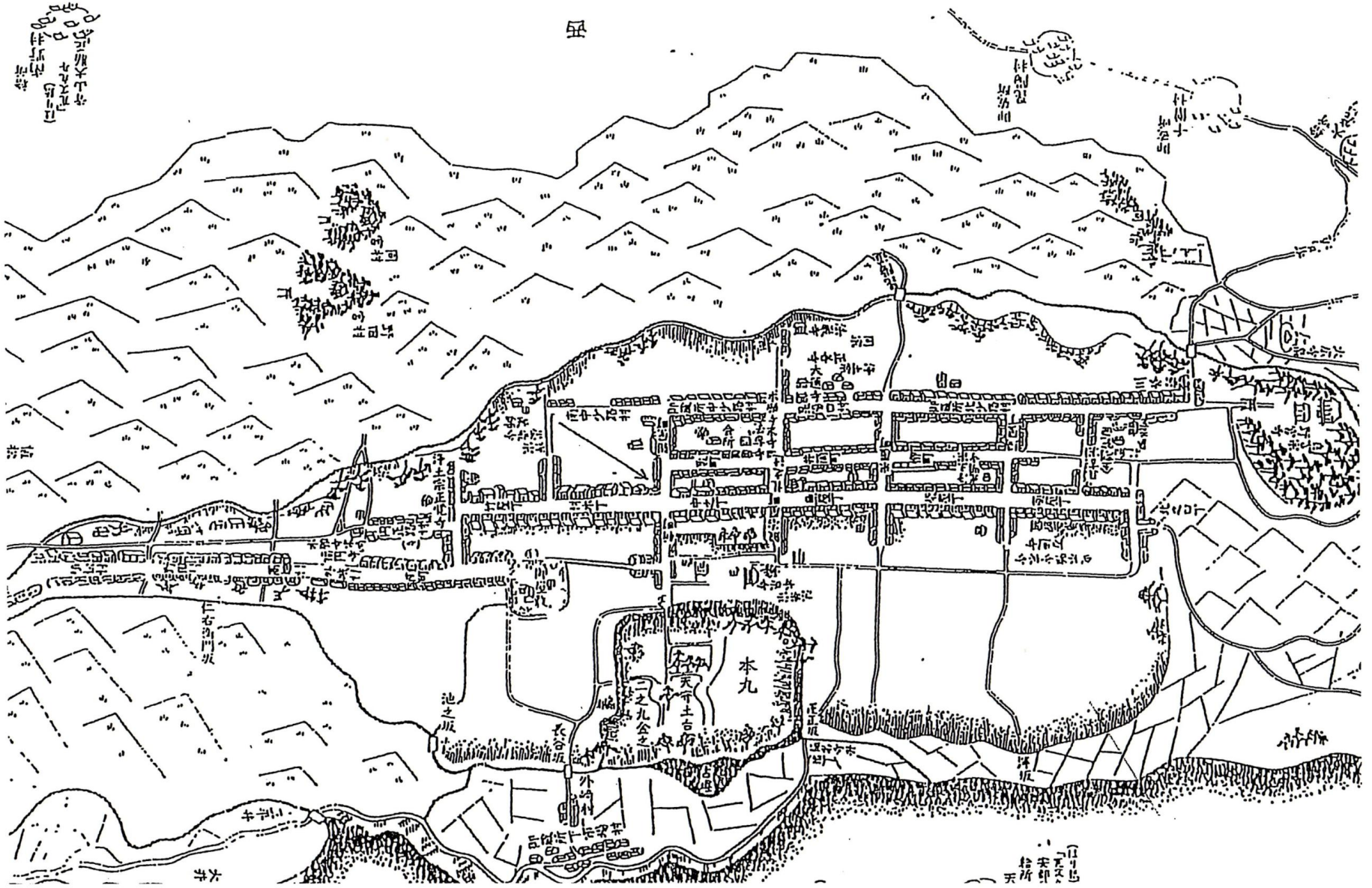
次は召使い女388人と女房付きの若者124人の大量処刑であった。非戦闘員であったが、4戸の農家に押し込んで外から釘付けにした上、周囲に干し草や枯れ枝を積んで火をつけ、全員一斉に焼き殺してしまった。信長公記には『風の回るに従いて、魚のこぞるように上を下へと焦熱、大焦熱の炎にむせび、おどりがりとびあがり悲しみの声煙に連れて空に響き、獄卒の呵責の攻めもこれ成るべし。肝胆をうしない、2日とみる人なし。』

第3の処刑は、京都六条河原で行われた。村重の妻“だし”をはじめとし、村重の妹野村丹後の妻、村重の娘である隼人介の妻、その他重職の妻らであった。いずれも車1両に背中合わせに乗せられ、8両16人と子供たちは1台に7、8人ずつ乗せられて西国街道を京都まで運ばれた。いずれも経帷子の上は美しく着飾り、両の手には数珠を持ち、瞑目する姿はけなげで涙ぐましかったと言う。中でも一際目立ったのは村重の側室、だしの方で、今楊貴妃と言われた美女であった。処刑の座に着いても動じることなく、処刑の土に会釈をして合唱し刑場に消えていった。続く女房達も、これにならって少しも乱れず、その最後は実に立派であったと。

更に処刑は続いた。尼崎で姿を消した家老荒木久左衛門の息子、14歳の自然、伊丹安太夫の8歳の息子、二人ともおとなしく最後の所は此処かと、敷皮に直り、処刑される姿は見る者皆褒めぬはなかった。



# 寛文9年(1669)伊丹郷町絵図





# 有岡城惣構と現在(1)



岸の砦跡に残る土塁  
(猪名野神社境内)



有岡城跡



上臈塚砦跡((現)伊丹シティーホテル)



墨染寺構内(女郎塚)



鶴塚砦(現在民有地)





## 有岡城 惣構と現状(2)



発行：伊丹市教育委員会事務局 生涯学習部 社会教育課  
〒664-8503 伊丹市千僧1丁目1番地  
電話：072-784-8090 FAX 072-784-8083

この印刷物は3万部作成し、印刷費は1部あたり9.9円です。



岸の砦土塁跡(猪名野神社境内)



内堀跡



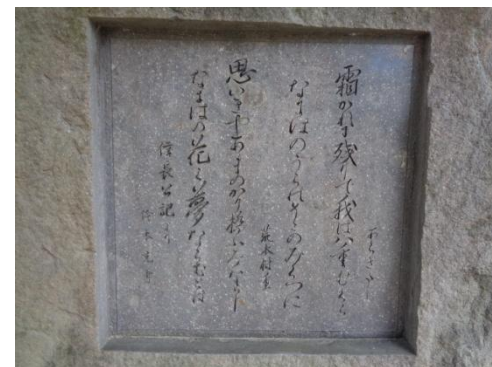
荒村寺(村重の位牌保存)



鬼貫句碑; 古城や茨ぐろなる蝨斯



有岡城石垣



だし(村重の妻)と村重の歌碑



# 黒田官兵衛の幽閉



天正6年(1578)11月9日高山右近の高槻無血開城に続き、24日  
中川清秀の茨木城が無血開城による降伏であった。その情報を受け  
た羽柴秀吉は、播州三木の別所長治と対陣していたが、信長公が摂  
州へご発向の由と聞いて諸兵を其の儘に、御陣所見舞いにはせ参じ  
た。そして『お許いただけますなら、今一度村重に意見を加え、前の  
忠義を継がせばや』と。然し秀吉の説得も村重を動かさなかった。秀  
吉はそれでも何とか村重を翻意させようと、今度は村重と親しかった黒  
田官兵衛孝高を有岡城へ送った。然し今回は官兵衛を捕らえて幽閉し  
てしまった。孝高は有岡城の落城まで1年余りを拘束状態を強いられ  
生涯片脚の障害が残った。

黒田家譜 ; 天正6年(1578)孝高33歳「孝高久しく有岡城の獄中に在りて」

其窮屈堪え難し、此間孝高の家臣母里太兵衛、等かはるがはる商人の形を学び、孝  
高の獄の近辺に行って安否をぞうかがいける、表は番厳しくして近づきかたし、後ろには  
ため池有りける故、番をば置かざれば、此所を見立、夜に紛れ栗山善助密かに池を泳ぎ渡  
り、牢に近づき、播州の様態世上の成り行きを告げたりける。

黒田如水伝 ; 大正5年(1916) 金子堅太郎著(明治時代司法長官など歴任)

「有岡城の西北の隅にありて、その後ろには、水深き溜池有り、又その三方は竹藪を以て  
囲まれたれば、太陽の光を見る事能わず、土地陰鬱にして、湿気常に膚を襲ひ、さながら  
今生よりの地獄なりき」とある。

〈左写真〉本丸西北に5.5m×7.5mの牢跡と思える石垣跡がみられる。本丸の構内で土  
塁の石垣の内側に面しており必ずしも“陰湿な”感じはしないが栗山善助が泳いで渡ったの  
が“内堀”であったとすれば、土塁を超えれば牢に近づけた筈。



# 有岡城での茶会の様子



荒木麗茶碗

荒木撰津守村重→ 沙界道珍→ 千利休  
徳川家康→ 尾張徳川家へ伝わる



大高麗茶碗

千利休→ 荒木村重→ 徳川家康  
→ 尾張徳川家へ伝わる

一三三 宗及茶湯日記 他合記 天正五年(抄出) 茶道古典全集七

同四月十三日朝 荒木撰津守会 及一人

一 風炉 うは口平かま、小板ニ、手桶、後ニ一床 かふらなし、薄板ニ、竹を生て

一 キ天目、台なし、薄茶 染付茶碗

かふらなし、水あけて、後ニ及床へあけ申候、薄板ニ炭、及おき、薄茶もたて候

仕立 木具、足なし、吉野こぎ 露汁

ふきのほしきて、銚子 後ニ焼あい、引て菓子 ぬりふち高ニ、ぬきくり さんかん さんどん

右かふらなし、始而見申候、なりハ是ノよりほそりとみへ、七いもひくきやうニ候、のとはそくか、口ひらきすぎたるやうなり、口ハあつく候、土赤候、むらさき心ハなく候、そこさかり候、色あらしきやう見え候、ひゞき少量もなく候

同十二月六日朝 荒木撰津守殿会 人数 宗易 宗及

口切

## 荒木茶碗

作品名 唐草文染付茶碗 銘 『荒木』  
年代 中国・明時代  
制作年 16世紀  
寸法 高;7.0cm 口径13.8cm  
指定 大名物  
所蔵館 徳川美術館

## 荒木茶碗

(解説) 低い椀形の茶碗である。見込みと外部側面に呉須で装飾的な唐草文が描かれているが、高台を除いて内外に掛けられた乳白色の釉の為、文様は不鮮明であり、全体に細かな貫入(ヒビ)がある。別名を「高麗茶碗」もしくは「荒木高麗」と称しているが、中国南部産の呉須絵陶器であろう。16世紀後半の茶会記に「染付茶碗」として頻繁に見いだされる茶碗が、この荒木茶碗、或いは同種の椀と考えられる。(玩貨名物記)より



## 茶人としての村重

1. 茶人(文人)としての生き様 荒木村重(1535~86) 茶道の師匠:千利休 津田宗及 今井宗久
2. 天正10年 茶人として生きる決心(6月2日本能寺の変)。道薫と号する村重は、尾道で変を知り哭踊する秀吉に仕官を打診か その仲介は秀吉茶頭の津田宗久か(名物茶道具の預け先)
3. 天正11年 堺に向かう 脳裏に浮かんだものとは
  - ①天正元年 信長との出会い一打てば響く主従蜜月の時、逢坂の出会い一身を粉にして信長に仕え、重用され、摂津一国の大名に抜擢され、首府を伊丹・有岡城に決め、順風満帆の頃。
  - ②天正六年の反旗  
信長の非人間性に決別し毛利と連帯し戦いを挑んだが、殆ど何も出来ずに敗れ、領民を巻き込み一族・家臣を信長の残忍な処刑により、悲惨な死に追いやった事。
  - ③そして自分一人が生き残っている。  
あの時の反旗の決断は正しかったのか。法敵信長を討つという目的は、光秀によって達成されたが、歴史の無常さ、運命の皮肉に、いたたまれなかったであろう。
4. 天正11年 堺上陸 秀吉のお伽衆となる。堺で待っていたのは
  - ①秀吉の茶頭衆あげての連続4日の6茶会開催という、凱旋將軍並みの大歓迎であった。  
正月の茶の湯 ・1月19日朝亭；宗易 客；道薫一人・1月20日朝亭；宗及 客；道薫・1月20日昼亭；宗及 客；道薫 宗易・・・以下1月22日まで6席
  - ②5月24日朝 筑州様 於坂本御会始め 道薫のかぶらなし花瓶披露  
・・・7月7日・・・  
9月16日 秀吉様御興行 御道具揃えの会 宮内卿法印 宗易 道薫 宗安 宗及  
・・・11月11日・・・
  - ③天正12年 前年の華やかな生活に比べ秀吉との接点が消える。
  - ④天正13年 最愛の茶器 兵庫の壺を召し上げられる・・・2月6日・・・2月11日・・・  
2月25日 秀吉様被成御上洛候 於京都、道薫所持の兵庫の壺を三介様へめしあげられ候、  
(代)千五百貫文
  - ⑤天正14年 堺に死す。5月4日 位牌 秋英宗薫居士(南宗寺)

ある人が訪ねた。利休答える。「夏は如何にも涼しきように、冬は如何にも暖かなるように、茶は服のよきように、是にて秘事はすみ候」「それは誰も知っていることだ」「それなら私が言ったようにやってみてください。私は弟子となるべし」

# 村重の遺児；岩佐又兵衛

3/2(土)

28 土曜日 享月 日 癸卯

**岩佐又兵衛作 洛中洛外図、国宝に**



文化審議会は11日、国宝に、浮世絵の祖と称される岩佐勝以(又兵衛)による「紙本金地著色洛中洛外図」(東京国立博物館)や「木造観尊坐像 像内納入品」(奈良・西大寺)、「黒草威胴丸」(奈良・春日大社)、「称名寺聖教金沢文庫文書」(神奈川・金沢文庫)の4件を指定するよう文部科学相に答申した。重要文化財(重文)には、藤原俊成の自筆書状(兵庫・香雪美術館)など46件の美術工芸品を指定することも答申した。▼7面

町に唯一残る国産第1号品一覽

あわせて、長野県軽井沢

の本格的な工業化住宅「山崎家及び臼井家別荘(セキスイハウスA型)」など199件の建造物を登録

①「紙本金地著色洛中洛外図」(部分)  
藤原俊成自筆書状「香雪美術館所蔵、兵庫県教育委員会提供

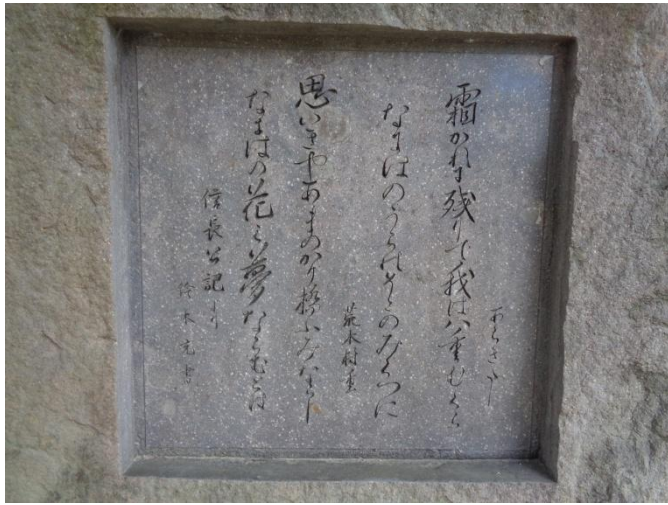




洛中洛外図部分拡大(国宝)

村重の末の男の子が、天正六年(1578)籠城中の伊丹有岡城内で生まれた。これが後の浮世絵師の元祖、岩佐又兵衛だと言われている。落城も間近い頃、乳母に抱かれて城を出、京都西本願寺の小院に隠れ母方の岩佐姓を名乗った。長じて織田信雄に仕えたが、生来絵が好きで誰も書いていない生態風俗を映して一家となし、人呼んで浮世絵又兵衛と呼んだ。織田信雄が失脚した後、三代将軍家光公に召し抱えられ、息女千代姫がおわりの徳川光友公に嫁すとき、又兵衛は調度品の絵を担当した。慶安3年(1650)6月22日江戸で死んだ。73歳であった。平成29年に洛中洛外図が国宝に指定された。



# 有岡城の歌碑



## あらきたし

- ・霜がれに 残りて我は 八重むくら  
なにはのうらの そのみくつに

霜がれの冬に残る私は、幾重にも生い茂った雑草のようなもので、難波の水底の藻になってしまうのだなあ

## 荒木村重

- ・思いきや あまのかけ橋 ふみならし  
なにはの花の 夢ならむとは

果たして思ったであろうか。これまで自分でやって来たことは、獵師が 間に合わせの仮橋を踏んで平らにするように、同じところを何回も往ったり来たりしていたようなもので、難波の花も結局は夢のまた夢であろうとは！

あらきたし(右)と荒木村重(左)



## 伊丹之親

- ・春秋の 花と月とを ときならて  
見はてぬ夢の 暁はうし

春の花と秋の月とを季節はずれに(季節にあわないままに)、最後まで見終わらない、そんな夢からさめた暁は、何となくもの憂い感じた。

# 有岡城落城にかかる年表

(浅岡俊夫作)

年号	月日	摘要・備考
天正6(1578)	10. 20	荒木村重、茨城・中川清秀と高槻・高山右近と共に信長に叛き本願寺に内通
同年	10 下旬	黒田勘兵衛(孝高)、村重説得に伊丹を訪れ、禁獄される (黒田家譜)
同年	11. 初?	孝高家臣栗山善助ら、商人に姿を変え、孝高の獄を探る (黒田家譜)
同年	11. 06	信長勢、木津川口に毛利の水軍を破る
同年	11. 09	信長、摂津に進軍。9日、高山右近、23日、中川清秀相次いで帰順
同年	11. 14	信長勢先陣、伊丹へ押し寄せ、近辺放火。
同年	12. 08	信長勢、鉄砲と火矢でもって有岡城を攻めるも、難攻不落
同年	12. 11	信長、古池田に陣取り、伊丹を遠巻きにして長期戦の戦法に切り替える
天正7(1579)	09. 02	村重、毛利の援軍来たらず、近習5、6名をつれ密かに尼崎城へ脱出
同年	10. 15	上臈塚砦の中西新八郎、信長に内応し、砦を開く
同年	10. ↓	たちまち町家と侍町が焼き払われ、裸城になる
同年	10. 24	信長、家康に外構えを悉く打ち払い天守のみを攻めるだけと黒印状を送る
同年	10. 27	信長、河尻与兵衛(秀隆)に家康と同内容の黒印状を送る
同年	10. 28	秀吉、小寺休夢に勘兵衛をあと数日で救出できる旨の書状を送る
同年	11 中旬	滝川左近、天守を攻め破る。栗山善助、勘兵衛を牢から救出 (黒田家譜)
同年	11. 19	荒木久左衛門ら重臣、尼崎へ村重説得のため脱出。落城
同年	12 中旬	村重一族一類を京・六条河原、尼崎・七つ松にて処刑
同年	12.	村重、尼崎城を逃れて花隈城へ移る
天正8(1580)	閏3. 02	村重軍、花隈城から出撃するも惨敗
同年	07. 02	花隈落城。村重、毛利のもとへ走る



# 戦国期 摂津の国



## 辻の碑(いしぶみ)・・摂津のへそ

この碑は西国街道と多田街道が交わる「辻」にあたり、高さ92cm、幅76cmで建てられておりこの碑には銘文が書かれていたが現在は剥落してしまっている。しかし寛政十年(1798)刊行の摂津名所図絵には『従東寺十里 従関戸七里 従須磨七里 従大小路七里』と刻まれていた。この碑は村が摂津の国の中央に在る事を示しています。国境からの距離を刻んだ古碑としては有名な『多賀城碑』(宮城県)は“壺の碑”とも呼ばれ松尾芭蕉の「奥の細道」で喧伝されている。

一方、この碑の年代は不明ですが、川辺郡史には、「伝説に源満仲の立つる所といひ」とある。





## 村重 まとめ

- ① 築城の名手 惣構の城を築くという発想（日本最古）
- ② 下克上の男―戦国時代の風雲児  
池田家を乗っ取る／摂津の3守護（高槻・池田・伊丹）を追い落す
- ③ だし姉妹（3人）を引き取る。室に迎える  
本名ちよぼ。父は本願寺の武将川那部左衛門尉。引き取りの経緯は不明。  
有岡城の出丸に住んだのでだし殿と呼ばれた。絶世の美女で今楊貴妃と呼ばれた。  
落城後京の6条河原の処刑の際の凛とした態度は、見る人の涙を誘った。
- ④ 織田信長に臣従して目覚しい活躍を見せ1年半で摂津一国の戦国大名に
- ⑤ 天正6年安土城の茶会に招かれる
- ⑥ 同年本願寺と連帯して信長に覚悟の反旗を翻す。（「野心御座なく候」―信長公記）
- ⑦ 官兵衛を幽閉
- ⑧ 奇想天外の作戦―主城を出て尼崎城で戦う  
（脱出は雑賀・毛利の援軍を求め戦うためだった―伊丹市立博物館資料）
- ⑨ 有岡城落城。官兵衛救出される。村重戦いを続行。
- ⑩ 信長報復の処刑。（織田信長の3大虐殺―比叡山僧侶・長島一向一揆・荒木一族の処刑）
- ⑪ 戦いに敗れ芸州尾道に亡命
- ⑫ 本能寺の変後、秀吉にお伽衆として仕え堺で没した
- ⑬ 茶華道、能に優れ利休7哲の1人。数寄道具を沢山持ち自ら目利きした「兵庫の壺」は、  
後世徳川家の所有となった
- ⑭ 反旗の理由は諸説あるが、信長の非人道性と戦うためであった
- ⑮ 人命を大事にする―降伏の武将（神吉城）を許す／本願寺付城の武将を返す／明智光秀の嫡男の室を返す／官兵衛を殺さず／高山右近の人質を殺さず／攻城の捕虜（老兵）を許す

後世の異端の絵師、浮世絵の祖と言われた岩佐又兵衛は、二人の遺児である